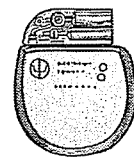


私の「生」と「死」を考える

唯識説の立場から

横山紘一



私は生まれ、生き、そして死んでゆく、と私は考える。私というものが、いつかはこの私は死ななければならぬのだと思うと、何ともいえない寂しさにおそわれる。ときには恐怖をも覚える。死にたくない、死にたくない、いつまでも生きていたいと叫びたくもなる。それなのに無常の風に吹かれて日々に肉体は衰えてゆく。現実には変えることができないといわれても、なかなか諦めることができない。死に対してだけではない。生まれ出でたことに対して恨みを抱くこともある。とくに苦境に立たされたときなどはなおさらである。なぜ私は生まれ

来たのか。むしろ生まれなかったほうがよかったのにと、私の生涯を恨むこともある。逆に順境におかれると、私とは何と素晴らしい人間であらうと、得意気になる。傲慢の鼻がどんどんと高くなってゆくこともある。このような私のあり方を静かに反省してみると、そこに「私、私」と思う自我意識が働いていることに気付く。私が生き、私が死ぬのだ、とそこに私というものを設定している。そして設定された私にいわば執着して、私が死ぬのは恐いと恐れおののく。

ところで、さらに考察してみると、その私とは何か、生きるとは、死ぬとは何かと深く考えることなく、無反省に生き、そして死を恐れているという私に気付く。私と言っているが、それはどういう意味での私なのか。肉体としての私なのか、それとも心としての私なのか。否、身心の結合体としての私なのか。どうも、何も分析することなしに、ただ気持から、あるいは「私は死ぬのだ」と言葉で考えて死を恐れているのである。

考えてみると、私とは何と無反省な生きものであることか。人間にあたるギリシア語のアントロポスは、反省するという動詞、アントローンに由来するときいている。人間とは反省する動物であるというのである。ならば私も人間である以上、ギリシア人に負けずに、「私」とは何か、「生きる」とは、「死ぬ」とはどういうことなのか、考えてみよう。もちろん考えるときには何らかの根拠あるいは立場が必要であるが、以下、編集者の要望にしたがって、仏教、とくに唯識思想をふまえて論を進めてゆくことにしたい。

*

仏教を学び始めた当初、私は無我という思想がまったく理解できなかった。もちろん深く学んでいなかったこともあり、またいま以上に自我意識が強かったこともあって、自分が存在しないとほとんどないと思ったりもした。

しかし、仏教を、とりわけ縁起という教えを繰り返し学び、そして自分なりに重ねてそれに思考を凝らすにつれて、徐々に無我思想は何をうったえようとしているかが明らかになってきた。そして最近では、「縁起」こそ仏教理解の要であると私は考える。そこでまず、「私」と言われるものと「縁起」との関係を考えてみよう。

仏教を興した釈尊は、当時の思想家としては、抜きん出た分析的眼の持ち主であった。自己に対する洞察も鋭く、自己の内部を次々と観察・分析し、より存在として本質なるものを発見していった。いま釈尊も行なったであろう自己分析を私なりに試みてみよう。

私は身体と心から成り立っている。このうち身体は
大脳・小脳・脊髄、さらには数多くの臓器・筋肉・神

経などから出来上がっている。さらにそれら大脳ないし神経もこれまた無数の細胞から構成されている。さらにそれら細胞の一つ一つもまた無数の分子・原子から構成されている。

心にしても無数の内容に分けられる。視覚ないし触覚という感覚をはじめ、あれこれと考える意識、さらには、むさぼり・いかり・うたがい・ねたみなど、数えきれないほどの種類の心から心は構成されている。

この分析をまとめると、私は数多くの要素から成り立っているといえることができる。言い換えると、私は諸々の縁から生じたもの、すなわち縁起の法である。したがって私というものは存在しない、すなわち無我である」と判断することができる。

この分析の最後の辺りの論法には、もう少し説明が必要であろう。釈尊が「縁起の故に無我である」というのは、次のような意味である。

「私は数多くの要素から成り立っている」というこ

とは、「私は諸々の縁から起こったものである、すなわち縁起の法である」ということである。ところで「私」といえば、そのようなものが実体としてあると考えるが、それはたんに「私」という言葉があるにすぎず、実際にあるのは、私が生じる縁となった諸要素だけである。したがって私というものは存在しない、すなわち無我である。

すなわち釈尊は、前述したように、鋭い分析の眼でもって、ある一つの事象を（この場合は私を）、より本質的な要素に分解し、もとの事象は（すなわち私は）本来的には存在しないと結論したのである。この釈尊の炯眼はまさしく現代の科学者の眼にも相通じるものであると私は考える。先般、NHKの「人体、驚異の小宇宙」という番組は、人体の驚異的な組織とその機能とを細部にわたって放映したが、それを見て、私は、「縁起の故に無我である」という釈尊の主張をより強く受け入れることができるようになった。自分ならざる無数の他者が、自分ならざる力によってこの私の生命を支えてくれている、

という事実を知らされて、何ら自分と呼ぶべきものは何処を探しても存在しない、ということに気付いたのである。たとえば小腸の表面にある栄養吸収細胞は一日でその役目を終えて新しい元気な細胞に替わるために滅んでゆく。まさしく私という「自分」が消化吸収するのではなく、細胞たちがその働きを続けてくれているのである。それなのに私は「私はどうもこの頃、腸の調子がよくない」と、あるときは嘆き、またあるときは「私はこの頃元気がいい」といつて驕り、そこに「私」というものを設定する。しかしNHKの番組が教えてくれるように、私ならざる他の多くの力（諸器官・諸神経ないし諸細胞の働き）によって生かされていると気付くとき、どうしてそこに自分というものを設定することができようか。

*

私は他の力によって生きている、というこのあり方を唯識派は「依他起性」と名付けた。縁起を依他起と言い換えたのであるが、これによって自己が無我であることがより明確に表現されているように私には思われる。この言葉をかみしめて味わい、自己の内外に展開する様々

の事象をこの言葉に合わせて観察するとき、「私は私以外の他の存在、力によって生じ、そして現に生きているのだ」ということをますます実感するからである。精子と卵子の合体によって私は生まれて来たのであるが、あの精子と卵子を私ということがどうしてできるであろうか。心臓は鼓動し続けている。しかし私が心臓を管理統御して打ちつづけさせているわけではない。何か自己ならざる他の力がそこに働いているといわざるをえない。私は、この「他に依って起こる」という言葉を手がかりに、自己の内部にある「他」なるものを次々と発見してゆきたい衝動にかられる。自己の内部だけではない、他人の中にも、自然界の中にも、私と関わってくる「他」なるものが何であるかと、木の蔓を手繰るように次々と手繰りよせたい気持ちでいっぱいである。なぜならそれが自分を苦しめている自我意識あるいは自我執着心の消滅につながってゆくと信じるからである。

自我意識とりわけ自我執着心こそ、私が生きてゆく上で最大の難敵である。前述したように私というものはないのだ、無我なのだといくら言葉で聞いてもなかなか自

我をなくすことはできない。抑えても抑えても「私は死ぬのだ」と気持と言葉で思っただけで恐れてしまふ。そこに自我への執着心が常に働いてやまない。

だから私は最近、死を根本的に解決するためには、私のなかにあるこの執拗な自我執着心を滅却する以外には方法はないとの結論に達した。

でも言うは易く、行なうは難しで、それは容易なことではないと自分で痛感する。ましてや唯識派の説くマナ識(末那識)という心があるとすれば、なおさら困難なことである。「マナ識」とは、恒審思量といわれ、私の心の奥で、恒に(寝ていても醒めていても、否、生死相續するかぎり)執拗に、自分、自分と思いつづけている深層的な自我執着心である。確かに表層的な自我心は心の持ちようである。あるいは訓練しただけでは弱めたりなくしたりすることはできる。しかしそれも一時的なまやかしかで、汲めども汲めども地中から泉水が湧き出してくるうちに、自分、自分という思いが尽きなく起こってくる。そしてこのような私の心のあり方を静かに観察するとき、直接には知りえなくても、確かに心の奥で働くマナ

識の存在を強く感じることが出来る。そして生への執着は、そして死への恐れはこのマナ識を根源としているのであるうかと考えてみたりもする。

たしかに、マナ識がもしもあるとするならば、無始の時よりこのかたありつづけているような曲者であるのだから、容易には退治できそうもない。といって諦めては生死を脱することができない。とにかく先ずは理論的であれ、もう少し唯識の教説にすがって解脱への道をさらに進んでみよう。

*

その際、手がかりとなるのがアーラヤ識(阿頼耶識)という概念である。「アーラヤ識」とは、各個人の深層に働く根本的心であり、しかも個人一人一人の全世界を形成する可能性を蓄えた、いわば自己の根拠体とでもいうべきものである。

「アーラヤ識」という心が自己の世界を形成する一切を生み出す」というこの考えは、常識的にみれば容易には納得し難いが、長く唯識を学んできた私には、大きな勇氣と励みとを与えてくれる。なぜなら「一切の原因が私

のなかにあるのなら、私の心のあり様を自らの力で変革すれば、私の(私)も、私の(生)も、そして私の(死)も、これまで私が思っていたものとはまったく異なった様相を呈してくるのではないのか」という希望が持てるからである。唯識説を信じてその教えにしたがい実践するならば、生死の苦から解脱することが出来るのではないかと考えるようになったからである。

私は、生死からの解脱には次の二つがあると考え。

(1) 過去・現在・未来の三世にわたる生死輪廻から解脱する。

(2) 現に生きている今生で生死の問題を解決する。

このうち(1)の意味での解脱を目指す場合、アーラヤ識が輪廻の主体であるという考えが重要となってくる。もう語り草になってしまったが、あの三島由紀夫はアーラヤ識縁起にもとづく生死輪廻を信じて自決したといわれている。私は三島ほどには輪廻を信じることはできないが、もしも自分の来世というものがあるであろうという前提のもとに、(1)の問題を考えるなら、未来世の自己のあり方に向けて現在の私のアーラヤ識のあり

様を変革してゆかねばならず、そのためには日々の私の行為のあり方を常に善なるものにするよう努力しなければならぬ。なぜなら今生の行為すなわち業が、もしも悪の連続であるならば、それら悪行為はその影響をアーラヤ識のなかに種子として植え付け、私のアーラヤ識はもう悪の種子でいっぱいとなり、それら種子(業種子という)の力によって来生には、私は地獄に生まれるかもしれないからである。何と恐ろしいことか。できれば私は地獄ではなくて美しく楽しい天に生まれたい。ならば私はできるだけ「諸悪莫作・衆善奉行」の精神で、日々を、そしてこの一生を送らなければならないのだ。

でも私は容易には輪廻転生を信じることはできない。それが私にとってはつきりとした客観的事実ではないからである。でも唯識思想で説く分段生死と変易生死という二種の生死のあることを考えると、私は輪廻転生を信じた気持になる。分段生死とは、身体とその寿命とに境界がある生死で、ふつうわれわれ凡人がこうむる生死のあり方をいう。これに対して、変易生死とは、身体とその寿命とをその人の思い通りに長くも短くも変化せし

めることができるような生死であり、悟りに達した初地以上の菩薩と仏が行なうことができる生死のあり方である。私が輪廻転生を信じたい気持ちになったのは、この二種の生死説から、「凡人の生き死にだけではない。菩薩の、仏の、すなわち衆生済度を願いとした人々の生き死にだってあるのだ」ということを学び、生まれ変わりに変わることが、たんに苦の世界をさまようだけではないということを知ったからである。

死は、えてして個人の死という領域内だけでとらえがちである。私も私が死ぬことは恐ろしく寂しいと思ひ悩む。しかし私の生を、そして死を、他者救済のためのものとすべきであると自覚するとき、私の生死に対する姿勢が幾分でも変化することを私は自分のなかで確認することができる。もちろんそれはたんに知的な自覚だけでは不十分である。真に、そして根本的に自己の生死を他者の生死のなかに全面的に投入せしめるためには、自己の深層で執拗に働くあの自己執着心を根っから取り除き、自己中心的な世界から自他不二の世界に私の世界を変貌せしめなければならないのだ。やはりここでもまた、

マナ識、すなわち自我執着心の滅という問題にぶつかってしまった。でも、くじけることなく頑張つてさらにその滅に向かつて論理の歩を進めてみよう。

三世にわたる生死輪廻からの解脱という面からすれば、たしかに「生死輪廻の主体としてのアーラヤ識」という考えに考察の眼を向けることは、私には重要になってくる。しかし、現に今生に生きつつある私にとっては、前述した二種の「生死からの解脱」のうちで、今生で生死を解決するという問題に、より強い関心を持っていると白状せざるをえない。すでに述べたように、私は、「縁起の理」を理解することが仏教の肝要事であり、自我執着心がどれだけ薄れているかは、その「理解」の程度いかによると考えている。アーラヤ識説についても同様であり、アーラヤ識縁起をどのようにだけ深く理解しているかが私にとって大きな問題となる。以下、自分の確認のためにも、この縁起説に対する現時点での私の見解を述べてみよう。

*

アーラヤ識縁起説は、根本的には、「アーラヤ識から

展開するこの私の世界は(したがってこの私の生も死も)、幻のごとき存在にすぎないのだ」ということを主張しようとしていると私は考える。眼を開け、自分の肉体を見て、それに対して私は「私の肉体である」と思う。最近めっきりと増えた白髪を鏡のなかで発見し、「自分も年をとったものだなあ」と感傷にふける。私の人生も残り

少なくなつてゆくのだとあせる気持ちが生じる。ここには「私」と「肉体」という二つのものが設定されている。しかし唯識説にしたがえば、私というものも肉体というものも、「遍計所執性」である、すなわち「本来的には存在しないのに、自我執着心に裏付けされた意識が言葉でもって強引に存在すると考えたもの」である。

たしかに私は、私の肉体そのものがあるとしても、それをけつして見ることも、それに触れることもできない。見ている肉体、触れている肉体は、私のうちの無数の細胞から構成される複雑な諸器官(網膜・水晶体・

大脳・神経・皮膚等)の働きの結果として、私の心のなかに、いわば影像として生じたものである。数十億、数十兆の細胞の共同的作用の上に出来上がったものである

から、あたかも複雑なフィルムと映写機によつてスクリーンに投射された映像のように、本当は存在しないものの、幻のようなものであるともいえるであろう。

このように、私が見る肉体は、無量無数の縁によつて生じたものであると認識するとき、この肉体はその姿を変貌して、まさに依他起的存在、縁起的存在、すなわち幻の如き存在として私に見えてくるように思われる。しかし思われるのであつて、まだ見えてはいない。だが前述したように、あのNHK放映の「人体」という番組を見たことによつて、肉体が幻であるのだという気持ちが一段と強まってきた。また、DNAからなる遺伝子のなかの複雑な情報の働きからこの私の肉体が形成され、現在も維持されているという科学的な発見は、「アーラヤ識縁起の故に無我である」という唯識説の主張を理解する際に、私にとって一つの力強い理論的裏付けとなつていく。

もちろんアーラヤ識のなかの「種子」といわれるものを遺伝子と同一視すべきではない。ヨーガによつて発見されたものと、科学によつて発見されたものでは明らか

かに異なっているからである。しかし、私は、時と場所とを超えて人間に共通したいわば「思考の枠」といったものがいくつかあるように思われる。その一つが「現象的なものは、その奥に、ないし背後にあるより根源的な力によって作られる」という見方であると思う。種子も遺伝子もそのような人間の思考の営みがもたらした発見物であるといえるのではなからうか。アーラヤ識は別名「一切種子識」ともいわれ、自己の世界の一切を作り出す力を蓄えているという。しかし私はこのように聞き学んでも、自らそのような種子の存在を直接確認したわけではない。科学が発見した遺伝子というものに擬して、アーラヤ識の種子はそのようなものであるのかと、それに思いをはせるぐらいのことは許されるのではなからうか。

*

とにかく、眼を閉じて意識を集中するとき、漠然とではあるが、ある何ものかを全体として感じる。それが「依他起」の世界の一つのあり方かもしれない。眼を開けるとすると眼前に肉体が現れ、私は「私の肉体である」と考

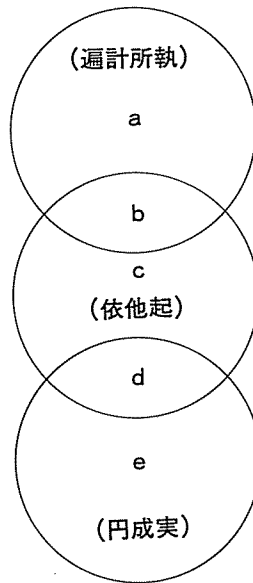
える。このとき、私のなかには、私、肉体という「言葉」と、同時にこの言葉を色付けした「自我意識」との二つが、なぜか知らないけれども起こってきた、ということに私は気付く。この「なぜか知らないけれども起こってきた」という事実は、唯識の考えに照らしていえば、自己存在は依他起である、すなわち自分以外の他の力によって生じたものである、さらに換言すれば、アーラヤ識のなかの種子を縁として作り出されたものである、という考えの具体的事実に対応するのではないかと私は理解する。

ところで、私はいま、簡単に「理解する」と言ってしまった。しかしどのような意味で理解しているのであらうか。このとき、私の内心から次のような声が起こってくる。

それは単に大脳皮質最表面の新皮質での知的理解にとどまってはいけない。もっと深い古皮質、さらには脳幹・脊髄の辺りでの理解に到らなければならない。そのためには、「言葉」と「自我執着心」とが織りな

す虚偽の世界、すなわち「遍計所執」の世界から抜け出て、まずは「依他起」の世界に立ち帰るべく努力しなければならない。私の「いのち」が展開する場は、遍計所執のなかであってはならない。まずは「いのち」を依他起へ引き戻し、さらに「円成実」の世界へと導かなければならない、という声である。

この声が私に訴えようとしている人間的な生き方は、例えば次のような図によって表現できるであろう。



この図のようにaからeまでの段階を経て、私というものが向上発展してゆくとするならば、各段階における私をどのようにとらえるべきか、を考えてみよう。

(aに住する私)

たしかにビックバンによって出来上がった宇宙のなかには、計り知れない量のエネルギーが動き回しめいているのかもしれない。でも、私の内部においても同じである。これまでの私の人生を振り返ってみるとき、そしていま一瞬の私が作り出す私の世界を、すなわち小宇宙のなかを静かに観察するとき、私の「いのちの営み」は、宇宙の活動にも匹敵できるほどに激しいエネルギーの活動が展開されていることに気付く。しかし、私のいのちの営みは、なんと虚構に満ちたものであることか。遍計所執に汚染された虚偽の営みであったことか。言葉と自我執着心に毒された世界であったことか。「生を願い、死を恐れた私」、でもその「生」も「死」も、そして「私」も、いずれも虚像にすぎなかったのだ。

(bに住する私)

もはや私はそのような虚像としての生と死に関わらない。無量無数の縁に生かされているままに生を生き抜いてゆこう。依他起の世界に身を置こう。それを「私の生」ということなしに。唯識を学び、ヨーガを修し、加えて

科学の成果も学びとってゆこう。

(cに住する私)

しかし一番大切なことは、ヨーガを修することだ。それによって表層の二元対立の世界が減して無分別の行為が展開する。そしてその清らかな行為が深層の心、すなわちアーヤ識にひそむ汚れた種子を、すなわち言葉と自我執着心とを生み出す力をどんどんと焼き尽くしてゆく。

(dに住する私)

汚れた種子がなくなればなくなるほど、アーヤ識は清らかになってゆく。身体も心も爽快かつ自由に活動できるようになる。

(eに住する私)

そしてついには、あるがままにある世界、すなわち円成実の世界に帰着く。

*

もちろんeの世界にたどり着くことは、今生の私では到底不可能である。しかし努力すればcの段階ぐらいには到ることができるかもしれない。

説からしてもそうである。一切は唯識である、ときくと、この世には自分しか存在しないとみる独我論であると考えられる可能性もある。しかし、けっしてそうではなく、唯識説も、「人々唯識」といって、私のほかに他人の存在をも認め、しかも私は他人を縁増上縁として存在する、いわば縁起的存在であると主張する。しかしこの際、肉体の場合と同じく、他人を私の自我執着心に裏付けされた言葉でもって遍計所執なるものとして捉えるところに問題が起る。私の自我執着心で色付けされた「他人」は本当の他人ではないからである。そういう「他人」として他人を見るのではなく、増上縁という縁で私と深く関係した、いわば依他起的存在として「他人」を捉えなければならぬと唯識説は強調する。たしかに、よくよく私の心のなかに観察分析するならば、そのような「他人」とは、私の心のなかにある影像なのである。私の心の深底から自我執着心が消え失せたとき、他人は私にとってどのような様相を呈するであろうか。

私は、他人こそ私の自我執着心を小さくしてゆく大切な縁であると、最近強く認識するようになった。もちろん

でもどこまで到り得るかは第二の問題である。まずは

私のなかに展開する諸現象を深く鋭く観察分析し、そこにどのような、自己ならざる「他」なるものが働いているかを探ってみよう。「他」なるものを多く発見すればするほど、依他起の世界により深く住み移ることができ。それは同時に、釈尊の説く「縁起の理」をますます深く理解することであり、それによって自我執着心がますます小さくなってゆくことである。逆に自我執着心が薄れば薄れるほど、縁起の理が明らかになってくる。

それはまた私が、これまでの遍計所執としての「私」ではなくなり、新たな、仮我としての、幻の如きものである。そして「私」が「私」に変化するのであるから、私の生死も新たな意味を持ったものとして私のなかに現われてくるであろう。私にはその日が待ち遠しい。

*

ところで、私の生死を考える場合、どうしても他人の存在を無視することはできない。なぜなら他人の存在を前提として私という存在が設定されるからである。唯識

ん事物や自然界に対しても、たとえば物欲や財産欲などの欲望を起こすこともある。しかし何といても、私が、自分が、という気持ちを抱くのは、多くは他人に対してである。むさぼり・いかり・ねたみなどの煩惱が起るの、ほとんどの場合、人間に対してである。であるなら逆に私の自我心を減するきっかけになるのもまた他人である。否、他人をのぞいて他にはないようにも思われる。

アーヤ識縁起説にもとづけば、私の表層的な心のあり様は、即座にその影響を深層の心、すなわちアーヤ識に与えるという。たしかにそうである。たとえば、ある人を憎い、憎いと思えば思うほど、その憎い心は増大してゆく。それは憎いと思う心がアーヤ識に種子を植えつづけ、その種子がまた芽をふいて憎いと思う心が倍増するからである。

このように表層と深層とが相互に因果関係にあるのだから、私の深層の心から自我執着心の芽をふく種子を焼き尽くすためには、あの三輪清浄の無分別智をもって家族、友人、社会のなかで生きてゆく以外には私には道は

ないのだ。「上求菩提・下化衆生」という。しかしこの二つは分離したものではないのだ。「他人」、「私」、そして両者のあいだに展開する「行為」、この三つを分別しない心、すなわち無分別智で行なう衆生済度の行為は、同時に私の深層の心を浄化するからである。

このように、アーラヤ識縁起説は自利と利他との相即をみごとに説明している。この教説を信じ、人々のなかで、社会のなかで、自己浄化を目指して生き抜いてゆくこと、これが残された私の人生の目的であると自分に言いかせている。

(よこやまこういつ・立教大学教授)